

## 現在に開く眼

ありがたいとは

甲「先生、私はありがたくありません。どうしたらみ仏のお慈悲がなくなるのでありましょう。」

乙「それはまだみ仏の心を十分知らず、あなた自身について深く知らないからです。そこで、まず、ありがたいとはどんなことか、と考えてゆきましよう。ただぼんやりとありがたくなりたいたいなどと考えていてはだめです。『ありがたい』とは『あることかたい』すなわち、あることがむずかしいということです。」

甲「それはまたどうということですか。何があることがむずかしいのですか。」

### 現在の内容

乙「ありがたいとは、現在に向かって眼が開かれた時に感ずる感情であります。言いかえると現在の内容です。」

甲「わかりません。」

乙「あなたは今、私に対座してみ仏を語っています。私にとつては、この現在がありがたいことです。今現在が尊くありがたい時でなく、処でないならば、いつ、どこにありがたいことがあるのです。多くの人は、ここでないどこか、今でないいつか、いつかどこかにすばらしいことがあるように思つて、幻を追うているのです。今、このこと、時と処を合わせると現在が生まれます。その現在はずまらぬものかと思つてゐるのです。それではいつまでたつても真の生き甲斐などはあり得ません。」

### 生き甲斐

甲「しかし、それは現在の幸福な方の言うことです。私はあまりにも不幸であります。」

乙「そうです。それは現在が幸福な人の言うことです。しかし幸福にも二通りあります。親鸞聖人の持つていられた幸福と、金持などの持つてゐる幸福と………聖人はそれはそれは不幸でした。むしろ九十年のご生涯は惨めでした。幸福どころか、きれいに人生に失敗した方です。けれども、だれが聖人を失敗者と言ひ得ますか。人生に勝てる人であり、至幸の人であります。聖人に生き甲斐がなかつたでしょうか。」

### 根本のまちがい

甲「聖人こそ人生の勝利者であり、ありがたい方であります。」

乙「聖人が人生の勝利者であつたように、私たちもまた必ず勝利者とならねばなりません。それでは聖人とあなたとの違う所はどこなのでしょう。」

甲「それは聖人は賢い尊い方ですし、私は平凡な人間だからです。」

乙「違います。そうした考え方が根本のまちがいです。釈尊も聖人もそんな考え方を打ち砕いてくださるのです。」

#### 真剣

甲「それではどこが違うのでしょうか。」

乙「人生および自己に対する考え方がもつと厳肅であり、生き方がもつと真剣だったのです。私どもはいずれの聖者を拝んでもその感じを受け取ります。宗教の世界では厳肅さと真剣さを要求します。墮落するとは、生きることには真剣さと、忠実さと、厳肅さを失ったことでもあります。」

甲「たしかにそうでした。私はまことに不まじめでした。」

#### 祭典のごとく

乙「私たちは幾度も祭典に出席します。祭典に必要なものは、厳肅と神聖と真剣であります。一人でも茶化すものがあったり、酔いどれがいたりしたら祭典は台なしです。祭典は、人生の縮図であり、人間の敬虔な心の表現です。祭典は必ず、神前に、仏前に、あるいは祖先の霊の前に、あるいは確固不動の信条の前において行われます。ただ、祭典の時が祭典であるのみではなくて、人生そのものが祭典でなくてはなりません。祭典のごとく生きよ。祭典のごとく歩め。私は人生の厳肅さを言おうとするのであります。」

#### その一歩にも

乙「ですから聖人のご一生を考えて見ても、その九十年の行歩のどこでもが宝玉そのもののように感ぜられます。もし、今私とあなたが語っているような場面の一つでもが、記録に残されていたとしたら、その腰をおろされた石にまで尊敬と合掌を捧げるでしょう。もしそのご足跡がわかったとすれば、一歩一歩に記念塔を樹てるでしょう。しかも聖人の歩みは、けっして外面的に派手であつたわけではありません。静かにして地味な、けれども真剣な一歩一歩をふみしめて行かれたのであります。自らの衷心の願いに忠実なものは必ず一本の道を歩みきります。」

#### 真に泣け

乙「あなたはなぜ泣いています。」

甲「それは、私のこれまでの歩みがいかに不忠実であり、いかげんだつたからであります。ありがたくなりたいたいという資格すらなかつた私です。」

乙「涙にも幾とおりもあります。私は『泣くな』とは言いません、お泣きなさい。うんとお泣きなさい。人はだれもかれも人生を祭壇のごとく考えていない。それに気づいた時、どうして愧じないでいられよう。今、あなたの三十幾年の過去を忠実に凝視しなさい。そうして一歩から更生の新生涯を出発なさい。」

火をも水をも

甲「私はなぜに今日まで不まじめな生き方をしたのでしょう。残念でなりません。」

乙「新しい発心と覚悟とをもって出発なさい。けっして遅くはありません。み法よりほかに何もものもあなたを勝利者にしてはくれない。み法を求め、み法を生きるためには、火にも入るべし、水をもくぐるべし。その覚悟こそ、あなたの一生を美しいものに荘厳するでしょう。」

如来

甲「私は今、ほのかに何ものかにふれた気がいたします。今まで長い間聞いていたことが、一つ二つ私のもものとして蘇ってきたような気がいたします。そして今までぼんやりしていた如来さまが、はつきりとしてきたようです。如来は生きていられました。そして私は如来をはなれて生き、如来を盲目にしていきました。」

乙「阿弥陀仏は永遠に現在の仏です。ですから現在をぬぎにした人には、如来の大悲の願心はわかりません。しかし現在のわれ、および因縁に目覚めた者は、そこに如来の召喚の声を聞きます。現在が尊く、ありがたくなくてどこに尊いありがたいものがあるう。ありがたいとは、平凡であり、つまらなかつた現在に対する驚きであります。如来は必ず現在に対する眼を開く。」

自力をはなれよ

乙「あなたは今、念珠を手にし、み法を求めて、私と対座している。私はおそらく、釈尊と対座してもこの心、合掌の心であるであろう。あなたは今、刑務所にもいない。酒樓おちやにもいない。世には今、恐るべき犯罪をたくらんでいる人もあろう。今自殺しかけている者もあろう。しかるに今、あなたはみ法を求めてここにいます。合掌してここにいます。如来の願心に生かされてここにいます。現在に対して、今一度はつきり見返してはどうです。そして明日の約束されないわれらであることを思ってください。」

甲「ありがとうございます。南無阿弥陀仏。……………私は醜い過去を生きてきました。そして今内心を探ねても、何一つ美しいものを持ち合わせておりません。それであるのに、今こうして尊いみ法の席に出されて、念仏申しております。一足み法を求めて歩もうと、仏力であると聞きながら……………まったく自力にしています。念仏申しております。私には三毒の煩惱しかなかったのです……………今こそはつきり他力であったことがわかりました。」

乙「終日行ずれども自力の行を行ずるにあらず。信ずることも、称うることも、聞くことも、拝むこともすべて、久遠から永劫を貫く大悲の願力の回向であります。しかも如来の願心は、煩惱成就せる凡夫の心中よりほかに働きかける所がない。いよいよ大悲の願心は、無懺無愧、五逆十惡の機を照破し、深信せしめつつ、限りなく、法の光を衆生の上に発揮します。」

甲「如来はわれにありたもうたのであります。生きることのありがたさを初めて知らしていただきました。」